

— (112-25) —

元用を譲つた結核病は、計つして昭和十二年頃だけでもなければ、元用だけのものでもなく、日本全体を風靡したものであつたことがわかつた。

ともあれ、その伝染力はインフルエンザの如く、その死亡率と恐怖及現在のがんに劣らなかつたので、結核病に対する認識及、いつまで消えないものである。

伝染病だけでなく、この「元田誌」は、明治時代の初期以前、即ち江戸時代からずっとやかの處つて、記録・資料などないで、ごく限られた事と場所の記録であることを、十分承知しておきたい。これは、やむを得ないことであり、残念なことでもある。その上真実性に乏しい聞きこみの方が多い故、非科学的観点もあり、一冊の書物としての価値も豊いことと承知しておかねばならない。しかしこの点はできるだけ克服して、広い立場からの真実性迫つていく資料を求めて記録し、後世に残していかなければならぬと思う。

(付) 参考までに「大分の医療史年表」をかりて、伝染病流行の歴史を知り、私達「元田誌」編さんの方反省材料役立てよう。

### 大分の医療史年表

文政五(一八二二)  
安政五(一八五八)

コレラ日本に上陸す

明治一二(一八六九)

コレラ全国的に大流行 豊前豊後で数千人  
死亡。別有医師矢田淳コレラ治療に活躍

震源地第一号発生患者合計五、七四人

うち死亡二、七三三人

明治一二(一八六九)

天然痘流行 県下の患者一、六四一人うち死亡

昭和二六(一九五一)  
赤痢再び大流行 县下の患者一〇、二七三人

三、一八七八人  
うち死亡二、五、五人

昭和二一(一九四五)  
赤痢流行 县下の患者二二五八人 死者六九三人

天然痘發生 白井コレラ發生 患者七人

うち死亡一人

昭和三三(一九五六)  
日本脳炎大流行 县下患者二〇四人

うち死亡七二人

小兒麻痺大流行 县下患者一五四人うち死亡一人

(あり)

【附】

思ひ出の食べ物 その二

— おふくろの味 佐伯の味 —

鎌倉市台居住

会員 神野幸人

大商町蒲戸出身  
(佐伯中学校三十三回生)

はじめに

「親爺の歴史」の中の、食べ物の項です。あなた達(生、娘さん)さすこ二人が大人になって、思い出す食べものが、べつありますか。

九州の片田舎の貧弱時代、物足りないときの戰争時代、そして敗戦。食糧難、配給、外食券、通配、欠配、販賣、販賣生活等の言葉も知らない今の人達には、想像出来ない食べ物もあるでしょう。

(注)編集子、以下同じ

人生の思い出する食べ物、それ及すしてやる料理のことではない。  
何であるか、日々、誰と自分で産娘さうと判断して下さい。

## (一) アンパン

三、四歳の頃、蒲戸の文作（おじ）さん（父）に連れられて船頭町（ふなつめまち）に行き、アンパンを一袋買（う）ってもらつた。母の手作り以外に、買い食いなどしたことはない生活の中で、生まれて初めて味わつた外食の味だ。大喜びで走り帰つた。  
芳島の家の前で、余り急いで一へこぼしたことかが、印象深く忘れられない。内野川の上手の柳がようやくふくらむ頃だった。

筋袖の着物、フエルト帽子スタイルの写真は、小生の記憶した写真一号である。写真とともに忘れまいアンパンである。

昭和四年頃だろう。

## (二) マツワ瓜

芳島時代（小学校以前）、福美兄弟安部亮次兄にくついて、長島や女島のスイカ畑に遊び、マツワ瓜を失敗しちもんだ。スリルがあつた。帰来り、高木牛乳の冷蔵庫に入れて冷やしづか、殆んど暑い畑で食べただけで、味は思つたよ、悪がつた。

昭和五六、六年頃か。

## (三) ニッケ（ニッキ）

佐伯小学校の奉安殿（天皇陛下にお写真を安置する建物）の横に、幹の径二十センチ程のニッケ（生ニッケイ）の木があった。お祭りの屋台で赤く染められて、般若庭どの太さ、長さ四、五センチは束ねられて売られていて、その滋味をすかした味は驚異的で、先生の目を盗んで小根を切つたものだ。何人かが知つていざ、木をまわりは振られた、いつも新しい土で柔らかかつた。

屋台で売られていたものに比べて、色も悪く味も悪かつたので、二、三回振つて止めた。  
昭和八九年頃であつた。

## (四) スモモ、ハダンキヨウ

小学校入学前に、福美兄弟の応援で新聞配達をしていて、小学校二、三年頃は、一人前に近かつた。  
早朝の武家屋敷は静かだ。そして広い敷地には果物が多かつた。その中の一軒、吉良先生の家はマキ（櫻）の生垣で囲まれ、庭にはスモモとハダンキヨウが見事だつた。早朝の庭に落ちてゐる実を拾つて食べた。  
時々石を投げて落として失敗した。これが五六、六個壊れして、かじりながらの新聞配達。美味だつた。

## (五) 夏みかん

これがも山際の武家屋敷本家。白い漆喰の土壁で囲まれた庭は、夏みかんが茂つていて。  
表門は御影石を敷き、カイヅカの並木が緑した左の國憐、裏門は夏みかんの茂みの道を通るまで、その傍だなると、千ヨイ千ヨイ失敬した。

この夏みかん皮が堅くて、手ではむけなかつたので、新聞を入れる袋にかくして持ち帰り、庵丁（あんぢやう）で走つた。すばやくて重曹（炭酸ソーダ）をつけて食べた。父兄とがめることはしなかつた。  
坂本家のおじいさんも知つていたらしく、何時が「坊や、夏みかん取つてもいいよ」とってくれた。  
明治二十六七年の頃、國木田独歩が下宿していたのがこの家で、「源おじ」「春の鳥」「鹿狩り」の稿を綴つた家である。

## (六) 梨

もあつた。

果物など買つてくれたことのない母が、小生高熱で癪床のとき、梨を買つてくれた。高熱で喉のかわきもあつたせいか、おんなじおいしい梨はなかつた。水分の多い梨は忘れられない。

今でも扁桃腺で熱が出ると、思ひ出して梨が欲しくなる。その頃、佐伯地方には、梨の木はあまりなかつた。

## (七) 牛乳

これ又、瘦人の飲む高価女もと思つていだ。高木牛乳に販賣牛が四、五十頭いて、毎朝人力車に似た車で、幅が狭くて、径の大きい木製の車輪の音も堅快に配達されていた。その黒塗りの箱は長持のよう<sup>レバ</sup>蓋があり、中には銅板で朱色で、一見金文を入れる大型スタイルだつた。いつだつたか、吉良先生宅に三本も置いてある左方で一本失敗した。気がとがめたのか、おいしい味ではなかつた。

この牛乳は先生宅の赤ん坊用とのこと。母乳しか知らないが家の子供達は幸福だ。盗まれることがない。

## (八) 五厘飴

ジャイアンツ飴玉のことである。

早や起きの新聞配達士、当番で駆まで朝刊を取りに行くときは特に早く、四時前には家を出る。そんなとき、枕もとに座籠<sup>シヤウラ</sup>につつんだこの飴玉が二個ずつ置いてあつた。母のプレゼントである。

子供の口はとてもおます大きさなので、販売店に帰り、地又配達に出発しても、まだ口に残つていた。おまく長時間あるので、内頬が白く変色し、ガサガサになること

## (九) 一厘飴

新聞配達の少年に親切な人がいた。中村の二軒長屋の一軒に安住なる人、新聞便の箱にちよいよい一厘飴を入れてくれた。

夕刊配達のときは、炬火がついてない日が多く、奥さんも寝ていられない点を考えると、中年の一人者だつたかも、二、三回しか顔を見たことがないが、この家忘れられない。終戦後一度訪ねたが、表札がちがつていた。軒屋しだのだろう。

新聞配達も、今日大人の仕事になつた。なぜに少年にやらせないのが不思議だ。おれわれのときは総員小学生、高等科の人だつた。

## (十) おつねい

純子が生まれた母は、大きな乳房に、余るほど乳をたくさんついていた。手で押すと一ミリほどの白い線が幾条ほどぼくわえていた。手で押すと一ミリほどの白い線が幾条ほどぼくわえていた。手で押すと一ミリほどの白い線が幾条ほどぼくわえていた。

「耕一（小生の別名）飲むか

「それくせえ

「コツコツもつてこい」

と、そのコツコツ七分程母乳をしぼつてくれた。

二口、三口飲んだが、生温かくおまくおいしいものがぽくなかつた。

昭和十二、三年頃

母四十歳位か。小生十二、三歳頃である。

## (二) おじや

貧乏人の、大家族の夕食は、経済的に大変だつたので

力だらう。わが家ではよくオジヤをつくつた。

朝食入盛りを味噌汁に入れて、<sup>まきと</sup>窓にかけ、薪をたいて、木の蓋の鍋でつくる。中に油揚げがあるときば、最高の味だ。

親父手作りの、年輪が大きく渦巻いた飯台の中段に、わらで作った鍋敷を置き、その上に大鍋をかせ、帆立貝で作つた貝柱<sup>かいじゆ</sup>ですくうオジヤの夕食、タクアンのお茶で腹一ぱい。

破れ障子の寒の風も、しばし忘れる。

### (三) かみなり

これは神野家の独特のものかも知れない。ケンチントン汁に似ているがちよと古がう。大根・人参・牛蒡<sup>ごぼう</sup>・里芋など主とするし、最後に豆腐を入れる。その豆腐皮<sup>豆腐皮</sup>を丁切るのではなく、手でぐしゃぐしゃにちぎるようにして入れる。そしてゴマ油をたらす。これも木の蓋の鍋、薪でたく。コクのある料理、冬の寒きから守るうとする生活の知恵である。

生活の知恵といえば、牛の脂だ。野村肉店から牛の脂をただで貰う。これをフライパンでやいて油をとり、それをヒビ・アカギレの手足に塗つたものである。

(へつべく)

墓風が改めすぎび、瘠ひそむむい日であつたが高木会長以下十二名参加、十時半津久見駅下車しが、津久見市役所ご勤務の新若俊秀会員が出迎え下さい。そなご案内で大友宗麟公の墓所を訪ねた。以前の墓が推定墓であつたのをまずいて、大友宗麟公顕彰会へ会長上田保<sup>一</sup>が、総額二千円を越す工費をかけて、昨年十月二日竣工したものである。キリシタン大岩宗麟公には、まことに似つかわしいもので、墓石はイタリー産の白大理石、蒲鉾型の壯麗なもので、墓石の正面には十字架が大きく刻まれ、その下にローマ字で

ドンフランシスコ 大友宗麟

と刻まれてある。

では、古い墓はどうなつてゐるかと見れば、古寺裡<sup>こじり</sup>の位置に移築してあるが、これは仏教葬式のやり方である。

さらば少しは守られた入口すぐ右手に、日名子実三作の「大友宗麟公像」のブロンズ像が立つている。大友の春日浦と同じ像だが、こちも辰合座<sup>じんあわざ</sup>上一メートルほどの小さなものが、そろ横に大理石に刻まれた墓碑の碑文がある。まずは清音會成、一應重翠<sup>うき</sup>來て、寒風吹きすきが中で拓本<sup>ひらく</sup>とつて

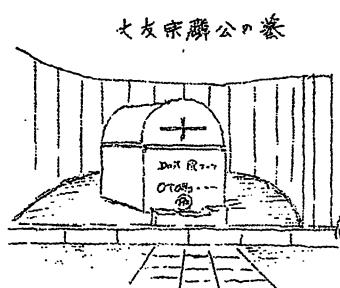
### 記録

## 早春の現地研修

### ① 新春初歩きで津久見市へ

まず一月二日、恒例の年頭初歩き、津久見行き<sup>を朝日に変更したが、行届かない点があり、定期前後伯駆で出かず、集まる札走官玄松山野原三会員とお引とり腹う、但序ノ次第会員にも無駄、ごめいおべきおかげした。おあび申します。</sup>

一月三日(火曜) 墓風が改めすぎび、瘠ひそむむい日であつたが高木会長以下十二名参加、十時半津久見駅下車



大友宗麟公の墓

へ編集子

こんな鄉愁をそる讀が、八回目と續く。文章簡潔、余韻に富み、忘れかねるふるの味が、蕭然と思はされる。今日はせいぶくろ、遠<sup>とお</sup>かってしまった幼少の日々、忘げがちになつてゐるふるさと、かの恩慕、人々はそれと笑つて聞かぬまい。

神野氏は由来前にこれをとめられてゐる。今幸中毎号掲載の予定、この愛読を乞う。